

台風後の誘発地震の可能性

地震が発生するためには、地下（地殻内部）に歪が限界近くまでたまっている必要があります。特に陸域では大きな低気圧（＝台風）が通過しますと、上から抑えつけている力（＝気圧）が広域的に低下した事になります。

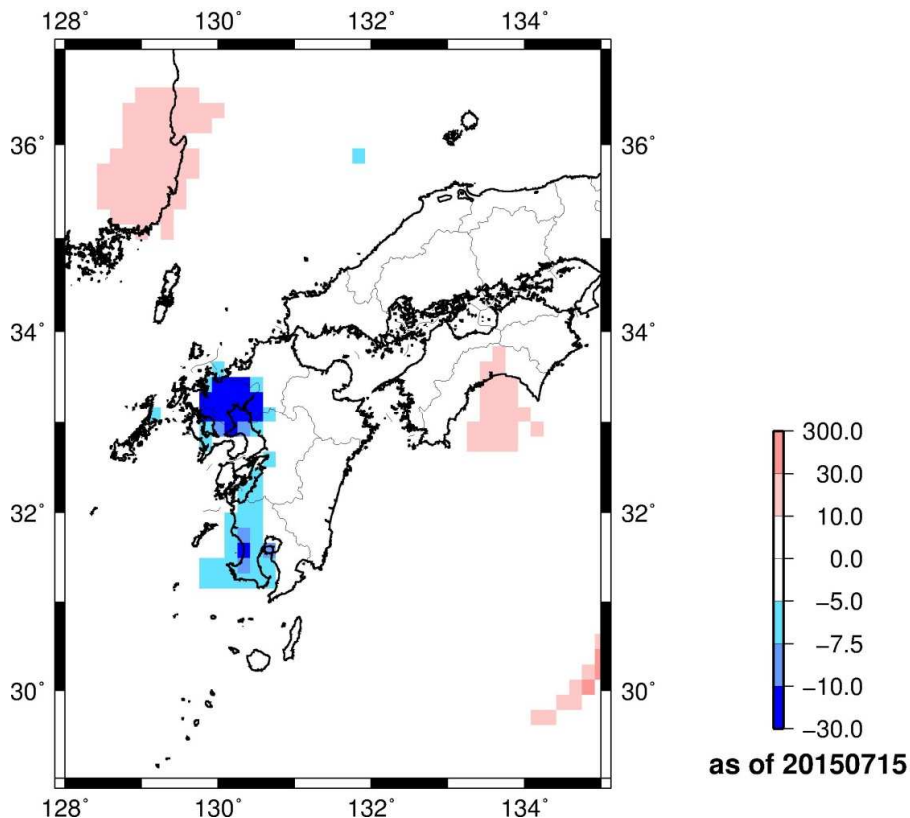
従来の地震発生の考えというのは、地震は歪がどんどん増加していき、地殻がその歪に耐えきれなかった時に破壊するというものです。もちろんこのような場合も数多くありますが、近年、「誘発地震」という考えが広まってきています。もちろん相当程度歪がたまっている事は前提となりますが、地震発生は歪が増加する場合ではなく、歪が変化しなくても、色々な自然現象が地震のきっかけ（トリガーとも言います）になりうると考えられるようになりました。

たとえば太陽で巨大な磁気嵐が発生すると、統計的には M7 クラス以上の地震が世界のどこかで発生する確率が高くなるという事が論文として発表されています。同様に低気圧の通過というのは、上から押さえつけている力（気圧）が小さくなるため、地下の断層が、普段より滑りやすく（摩擦力が小さく）なる可能性があるのです。

実際、大正12年9月1日の関東大震災の当日の朝に台風くずれのかなり大きな低気圧が能登半島付近を通過しています。もちろんこれが地震発生の全ての原因ではありませんが、低気圧や磁気嵐などが地震を誘発する可能性というのは最新の研究テーマとなっています。

また関東大震災であれだけ火災による被害が大きかったのは、昼時というだけでなく、この低気圧がもたらした強風がその一因であった可能性が大きいとの指摘もなされています。

九州およびその周辺の地下天気図



7月13日に大分県南部で震度5強を記録した地震（マグニチュード5.7、深さ57km）が発生しました。日向灘は地震の多発地帯であり、このクラスの地震は2年に一度位は発生しています。

上の図は2015年7月15日時点の地下天気図です。青い部分が静穏化が進行中の領域です。ただこの領域の異常はすでに継続時間は半年程度あるのですが、比較的領域が狭い事から、まだ深刻な地震の前兆とは考えていません。

下の3枚の図は今年の6月1日、4月1日、2月1日の地下天気図で大きなパターンの変化が無い事がわかります。

